

2022年 人間発達学部附属子育て支援センター活動報告

宮内 孝
本田 和也
早川 純子

はじめに

子育て支援センターは、2010年4月の人間発達学部開設と同時に整備した3つの附属機関の一つである。これまで、学生の学びを深め実践力をつけながら地域貢献を行う拠点として、様々な子育て支援活動を実施してきた。主な活動は、「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」「子育てひろば みなみん」「心理サポート」である。そのうち「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」は開設当初から実施。「子育てひろば みなみん」は1ヶ月のトライアルを経て2015年5月から、「心理サポート」は2016年9月から継続実施している。「子育て支援室」は、臨床発達心理士の資格をもつ学部教員が地域住民を対象に子どもや子育てに関する心理相談を受ける活動である。「チャレンジ運動教室」は体育専門の学部教員と学生ボランティアが、運動の苦手な子どもたちとその保護者に運動遊びを提供する活動である。「あそびの教室」は美術専門の学部教員と学生ボランティアが、地域の子どもとその保護者に工作を通じた親子遊びを提案する活動である。「子育てひろば みなみん」は非常勤保育士と学生ボランティア、そして学部教員により、地域の未就園の乳幼児と保護者を対象として交流の場の提供と育児相談を行う活動である。「心理サポート」は学部教員が障害のある子どもと保護者を対象としてコミュニケーションや姿勢・動作への支援を行う活動である。

「子育て支援室」と「あそびの教室」については、臨床発達心理士の資格をもつ担当教員の不在や新型コロナウイルス感染拡大により今年度の活動を自粛した。

以下は、2022年度「人間発達学部附属子育て支援センター」の活動内容である。

1. チャレンジ運動教室

(1) ねらい

幼児・児童の体力・運動能力は、低下傾向を示している。この問題を解決する一助として、「チャレンジ運動教室」を2010年から継続的に開催し

ている。この13年間の申込者合計は2571名であり、166回の教室を開催している。5歳から8歳までの4年間にわたって継続的に参加する子どもは少なくない。

参加する保護者と子どものそれぞれのねらいは、下記の通りである。

- ・保護者・・・子どもと一緒に運動を楽しみながら、子どもの心身の発育発達の様子を観察したり、それぞれの動きの指導法を身に付けたりする。そして、この教室をきっかけに、運動遊びを楽しむ時間を子どもに設定しながら、子どもの心身の発育発達を促す。
- ・子ども・・・運動遊びの楽しさやできない動きができる楽しさを味わいながら、多様な基本的な動きを身に付ける。この楽しさを動機付けとして、日常生活のなかで運動遊びに取り組む意欲と態度を育てる。

(2) 令和4年度の教室の概要

①参加申込者：142名

- ・幼児（5.6歳）とその保護者 36組
- ・小学校1.2年生とその保護者 53組

②教室開催回数：13回

- ・前期の部 6/4, 6/11, 6/18, 7/2, 7/9
(5回 7/16コロナ感染急拡大のため中止)
- ・後期の部 10/15, 10/28, 11/5, 11/12, 11/26, 12/10, 12/17 (7回)

③教室の内容

本教室では、特定の動きの習熟を意図する「動きの洗練化」ではなく、多様な動きの習得を意図する

「動きの多様化」を目指している。本年度に取り組んだ運動遊びは、下記の通りである。

a) 移動系の遊び

- ・信号ゲーム ・鬼ごっこ ・バルーン遊び
- ・しっぽ取り ・サーキット遊び 等

b) 操作系の遊び

- ・ゴミゴミボール遊び ・タオルを使った遊び
- ・新聞紙遊び 等

c) 姿勢制御運動系の運動

- ・マット遊び ・跳び箱遊び ・鉄棒遊び
- ・ダンス ・綱引き ・新聞紙遊び 等

④子ども教育学科学生の参加者：のべ260名

宮内ゼミに所属する3・4年生が、担当教員から事前指導を受けて、本教室の企画・運営そして運動指導の中心を担う。1・2年生は、子どもとかわりながらゼミ生の運動指導のサポートを行う。

当初は、子どもへの説明・指示がままならなかった学生が、子どもたちや保護者を対象とした運動指導ができるようになる。この経験は、教師に必要な実践的な力量形成に寄与している。

(3) 成果と課題

- ・参加者アンケートによると、参加満足度も高く、子どもの運動への愛好度も高まっている。また、「学生さんの励ましで、苦手なことにも挑戦するようになった」「学生さんからほめられることがうれしいようで、できることが増えた」「学生さんの笑顔に、親も子ども元気をもらえました。」など、参加した学生への肯定的な評価を得られている。
- ・幼児期から児童期への系統的な指導プログラムを、さらに開発する。
- ・本教室に参加する学生の学びを明らかにして、本学科のカリキュラム開発に寄与できるようにする。

2. ぴよぴよ

本講座「ぴよぴよ」は、ことばや発達の気になる0・1・2歳児と保護者の遊びの場である。実施に当たって、主な目的としては、以下の3つである。

- ①地域在住の0・1・2歳の言葉や発達の気になる子どもの療育を行う
- ②保護者も療育に参加することで、保護者が子どもへのかかわり方を学ぶ
- ③サポーターとして学生が参加することで、子どもへのかかわり方や保護者支援の在り方を学ぶ

(1) 実施の概要

月1回、年間10回(4月と3月は除く)実施した。実施日は、基本的には、毎月の終日曜日に行った。日曜日に実施するのは、平日に比べ、保護者が参加しやすいということからである。

指導に当たっては、ゼミ担当教員の本田が実施し、本田ゼミの3、4年生13名がサポーターとして参加した。

①参加組数

参加する子どもたちの実態等を踏まえ、今年度の定員を7組とした。年間を通し、参加したのべ組数は58組であった。

②活動内容

主な活動内容は、以下の通りであった。

時間	内容
9:30~10:00	受付
10:00~11:00	自由遊び・設定遊び
11:00~11:30	保護者勉強会

設定遊びの主な流れは、以下の通りであった。「メインの活動」は、子どもたちの実態を踏まえ、「新聞紙遊び」、「風船遊び」、「花紙遊び」などを行った。

設定遊びの主な内容

- あいさつ
- シャボン玉
- 大型シート
- ペープサート
- メインの活動
- 読み聞かせ
- さようなら

③保護者勉強会

毎回30分程度実施した。本公開講座は、「インリアル・アプローチ」によるかかわり方を基本としており、その技法を保護者に伝え、どのようなかかわりが子どもとの関係性を育むのかを学んでもらった。その後、「共同注意」や「愛着」などを中心に、具体的なかかわり方について学んでもらった。

(2) 今後の課題

本講座は、今年度から本学の公開講座の一つとして実施した事業である。来年度以降も実施しながら、以下の課題点に対応し、地域に根差した活動を続けていく予定である。

- ・地域在住の0・1・2歳の言葉や発達の気にな

る子どもの療育の在り方を検討していく。

- ・保護者も参加する「親子療育」の在り方を、地域に提案していく。
- ・本学科の学生が、縦断的に子どもへのかかわり方や保護者支援の在り方を学ぶ環境を整えていく。

できたと考える。次年度は、感染状況の収束を願いながら休止中の取り組みの再開や活動内容の復元を図り、さらなる学生の学びの深化と地域支援の充実化を図っていきたい。



3. 子育てひろば「みなみん」

子ども教育学科開設以来、子育て支援センターの取り組みの一環として、子育てひろば「みなみん」を実施している。地域の子育て家庭を支援すること、また、学生が乳幼児とその保護者とのかかわりを学ぶ機会を作ることを目的に、定期的な開催を続けてきた。しかし、令和2年3月から令和3年10月までは新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から実施を見合わせてきた。令和3年11月と12月には一旦活動を再開させたが、令和4年は感染状況が再拡大したため再度活動を見合わせる事となった。令和5年度には、本格再開に向けて準備を進めている。

おわりに

人間発達学部附属子育て支援センターの活動について2022年度の取り組みを報告した。人間発達学部による地域貢献活動の一環として、それぞれの活動が地域の子どもとその保護者を対象とし、各教員の専門性を活かした取り組みとなっている。学生と教員、そして地域が一体となって様々な活動を行うことで、大学と地域が融合した子育て支援が実現したものと自負している。

前年度に続き2022年度も新型コロナ感染拡大防止の観点から、やむなく一部の活動を自粛したり、内容を縮小することとなった。コロナ禍においても地域の子育て支援を継続し、子どもの育ちを支援する学びのフィールドとしての機能が維持